

西安博物院所蔵の唐時代の玉製装身具

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.44

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.44

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	北越戊辰戦争と新潟	P.2~3
特集2	特別展 玉と鏡の世界—西安・新潟友好交流特別展	P.4
歴史さんぽ	釜場跡の戦時形跡	P.5
おすすめの冊子	「みなとまち新潟の社会史」	P.5
みなとびあ研究notes	刀剣を愛でる人々	P.6
館長日記	高雄のフォーラム	P.7
収蔵資料紹介	懸硯	P.7
博物館あちらこちら	石庫の蔵戸の落としと鍵	P.8



帆樫成林(はんしょうせいりん)第44号
編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷/株式会社ウイザン

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
9月15日(土) 10:00~12:00	みなとびあワラ部	ワラソウリをつくります。初心者の方もどうぞ。	大人向けの活動・部員が対象
9月16日(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ(下町たんけん)	みなとびあの周辺を散策しながら、淡町の痕跡を探します。旧小澤家住宅あたりまで散策します。	部員が対象
9月22日(土) 14:00~15:30	みなとびあもめん部	博物館資料を使いながら、布生産にまつわる手仕事を体験する試みです。	大人向けの活動・部員が対象
9月23日(日) 14:00~15:00	日光写真	むかしのあそび、日光写真を楽しみます。	どなたでも・申込み不要・材料がなくなり次第終了
9月29日(土)・30日(日) 13:30~15:30	布を織ってみよう	お菓子箱を織機として裂き織りのコースターをつくります。	小学生以上・申込み不要・材料がなくなり次第終了

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

玉と鏡の世界—西安・新潟友好交流特別展

新潟市歴史博物館と中国・西安博物院の友好と開港150周年を記念し、西安博物院が所蔵する周・秦・漢・唐の各時代の玉と鏡を展示します。

会期 2018年9月15日(土)~10月28日(日)
休館日 10月1日(月)・15日(月)・22日(月)
観覧料 大人700円(560円)、高校生・大学生500円(400円)、小学生・中学生200円(160円)
※()内は20名以上の団体料金
※土・日曜日及び祝日は中学生・小学生は無料
※企画展の観覧券で、常設展もご覧いただけます。

主催 新潟市 西安市 新潟市歴史博物館 西安博物院

共催 新潟日报社 NST

後援 中華人民共和国新潟総領事館 非営利活動法人新潟県日中友好協会 新潟県教育委員会 新潟市教育委員会 朝日新聞新潟支局 毎日新聞新潟支局 読売新聞新潟支局 日本経済新聞新潟支局 産経新聞新潟支局 NHK新潟放送局 BSN新潟放送局 TeNYテレビ新潟 U-X新潟テレビ21 エフエムラジオ新潟 FM PORT79.0 FM KENTO

協力 日本通運株式会社新潟支店 新潟市文化財センター(まいぶんポート)

観覧事業	学芸員展示ガイド 毎週日曜日 午後2時から約60分間 ※事前申し込み不要。 当日の観覧料が必要です。 (小・中学生無料)	お月見ナイトミュージアム 日 時: 9月24日(月祝) 午後6時~8時 ※企画展のみを特別観覧、中国伝統楽器「二胡」の演奏、月見酒やお菓子のふるまいあり ※事前申し込み不要。 当日の観覧料が必要です。(小・中学生無料)	古代鏡チョコづくり 日 時: 10月6日(土)~8日(月祝) 午後2時~3時30分 会 場: 本館1階たいけんのひろば 定 員: 各日15名 参加費: 1000円(観覧料込) 申込み切: 9月28日(金)
	特別講演会「古代の鏡を語る」 講 師: 岡村秀典氏(京都大学教授) 日 時: 10月21日(日) 午後2時~4時 会 場: 本館2階セミナー室 定 員: 80名 参加費: 無料 申込み切: 10月12日(金)	古代鏡づくり 日 時: 10月27日(土) ①午前10時~12時 ②午後2時~4時 会 場: 本館1階たいけんのひろば 定 員: 各日10名 参加費: 500円 申込み切: 10月19日(金)	勾玉づくり 日 時: 10月28日(日) ①午前10時~12時 ②午後2時~4時 会 場: 本館2階たいけんのひろば 定 員: 各日30名 参加費: 200円 申込み切: 10月19日(金)

博物館 あちらこちら 石庫の蔵戸の落としと鍵

博物館の敷地内には、博物館本館をはじめいくつかの建物があります。その中の1つに石庫(いしぐら)があります。現在は、民具などを収めた収蔵庫の1つとして活用しています。開港当初は、旧新潟税関庁舎の保税庫として使用されていました。現在の建物は昭和57(1982)年に復元した建物ですが、旧税関庁舎とともに開港場新潟の在りし風情を今に伝えています。部屋は4室からなり、それぞれ独立しています。入口から各部屋に入るには、1枚の扉と2枚の戸を開けます。2枚目の戸は、内側が「落とし」の構造で、敷居に施された溝に棒状の栓が落ちてはまると戸が動かなくなる仕組みとなっています。これを動かして戸を開けるには鍵が必要で、中に入るにはこの鍵を使います。



次回企画展

第15回むかしのくらし展 「いれもの」

衣食住の日常生活や仕事、さまざまな行事などで使われた「いれもの」を中心に、むかしのくらしの道具を紹介します。

【会期】 2018年11月10日(土)~1月27日(日)
【休館日】 毎週月曜日(12月24日、1月14日は開館)
【観覧料】 無料
※常設展の観覧は有料です
【主催】 新潟市歴史博物館

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30~15:00
【会場】 本館2階セミナー室
【申込】 不要(当日受付・定員80人程度)
【資料代】 100円(資料のない回は無料)

◆9月の講座: 9月23日(日)
「《シリーズ 新潟の美術》10(最終回) 美術の値段」
講師: 木村一貴

編集後記

44号では、北越戊辰戦争について特集しました。本館でも、長岡市と新潟市の北越戊辰戦争ゆかりの場所を巡り、北越戊辰戦争について勉強する活動をボランティアが企画しています。「北越戊辰戦争」と聞くと、長岡で行われた戦争に光があたることが多いですが、本書をきっかけに、新潟市における北越戊辰戦争にも興味を持っていただければ幸いです。(鈴木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】 (4-9月) 9:30~18:00 / (10-3月) 9:30~17:00



「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日和山五合目 **北陸ガス NSGグループ** **Water Shuttle**
本間組 **田中屋本店** **堀川** **新潟 たいらち**

北越戊辰戦争と新潟

伊東 祐之

1 北越戊辰戦争観

今年、戊辰戦争から一五〇年にあたる新潟県立歴史博物館では福島県立博物館・仙台市博物館と共同で企画展を開催しているのをはじめとして、米沢、白石、鶴岡など東北各地で企画展やイベントが行われている。

一方、政府は、明治維新一五〇年を喧伝し、薩摩藩・長州藩などによる討幕から明治新政府成立に始まる日本の近現代の連続性を誇っている。そこでは明治維新は幕末の西南雄藩や長州の志士たちの懸命な活動や、苦難を乗り越えた維新官僚の「正しい」針路選択として描かれ、戊辰戦争はその過程での必然として捉えられているのか、中央や西日本では戊辰戦争そのものを大きく取り上げることがない。

しかし、東北の人々は、新しい時代は戊辰戦争での敗北や荒廃から始まったと考えている。東北にとって近代という時代は、如何にして日本の中に正しく位置づけられ認知されるかという課題に挑み続けてきた苦闘の時代と言っているのではない。そうした今も続く苦闘の始まりとして戊辰戦争を再確認する作業が行われているのだから。

近代を生きた多くの新潟県民にとって、戊辰戦争は悲惨な戦闘を目の当たりに

した記憶として語り継がれてきた。自分の暮らす村や町で殺し合いが行われたり、家が焼き払われたり戦場へ荷物運びに駆り出されたり、銃を持った兵士に食糧をうばわれたりした経験は、戊辰戦争しかないのである。戦前の郷土誌などでは地元が戊辰戦争に際し如何に大変であったかそれぞれ記述されてきた。しかし、北越戊辰戦争の全体像は検討されることはなかったといつて良いだろう。

そんな中で長岡は、東北諸藩と同様に城下は焼け野原となり、近代を戦後の荒廃から復興した時代と捉えてきた地域と言える。他の町村の多くが戦場として戊辰戦争を考えてきたのとは異なり、長岡は藩として戦争の当事者であり、戦争への視線も、なぜ戦ったのか、その責任はどこにあるのか、戦争からの復興を誰がどのように実現したのか、といったことが戊辰戦争論として語られてきた。それらの検証を行い、論の中心にいたのは今泉鐸次郎である。

その今泉の「河井継之助伝」が司馬遼太郎の「峠」を導いた。優れた作家の描く歴史小説は、多くの人々に「本当の歴史」と捉えられ、それまで語られることなかった北越戊辰戦争全体を、長岡藩の戦い、あるいは河井継之助の戦いとして認識させることになった。

『新潟県史』は北越戊辰戦争と越後の

諸藩や人々がどうかかわったか、という視点で論じたが、その叙述はわかりやすいとは言えず、県民の北越戊辰戦争観に大きな影響を与えることはできなかった。

2 戦争に巻き込まれた越後諸藩

ひるがえって東北戊辰戦争の一環として北越戊辰戦争を捉えるならば、北越戊辰戦争は会津征討を目指す新政府軍と米沢藩を中心とする奥羽越列藩同盟軍が越後を戦場に戦った戦争である。奥羽列藩同盟が成立する過程で、越後諸藩の意向とはかわりなく、越後口は米沢藩が中心となつて、越後諸藩の支援を受けて戦うと定められていた。もちろん奥羽越列藩同盟の成立以前から、会津藩や米沢藩の越後諸藩への圧力は高く、会津藩は越後幕領を預かったことを梃子に、桑名藩とともに越後で戦闘を始めていたが、越後諸藩が北越戊辰戦争に巻き込まれていくのは、同盟による方針の故である。

戦争の図式を明確に理解しにくかった河井が小千谷談判に臨み、結果、新政府軍ではなく同盟に加わり、この情勢に村松藩は押し流された。長岡城を失ったことで、奥羽越列藩同盟軍は加茂で成立する。新発田藩はこの情勢に抗うが、米沢藩に押し切られ最前線に立たされる。

3 戦時下の新潟の役割

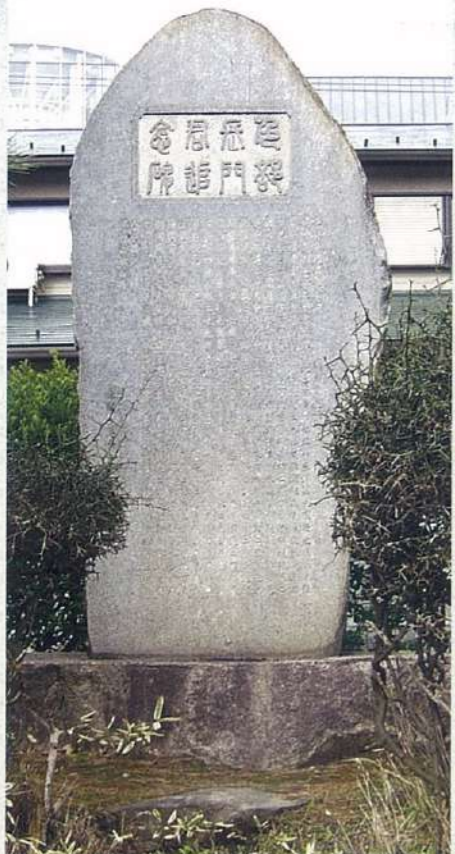
北越戊辰戦争をこのように捉えた上で、戦時下の新潟町、新潟町での戦闘を、悲惨な戦闘の場としてだけでなく、北越戊辰戦争全体のなかで再確認してみよう。まず新潟町の統治について概略を述べる。新潟町は幕府直轄領で新潟奉行が統治していた。新政府軍が高田に着き越

後諸藩に新政府への帰順を求めたのを機に、奉行白石千別は江戸へ逃避する。その途中で会津藩は白石から新潟町の統治を委託されたとして、慶応四

(一八六八)年四月に新潟町へ進駐する。ただし、新潟奉行所は存続し実際には奉行所の役人が行政事務を行っていたらしい。その後、帰国した奉行代理の田中廉太郎は、会津藩では新潟町民の統治はできないとして、米沢藩へ新潟町の管理を委託する。米沢藩はその要請を受け、越後出兵の指揮を執っていた色部長門を新潟町管理の専任とし、六月一日に引き渡しが行われる。その後、色部は新潟町を米沢藩のみが統治することで同盟に問題が生ずることをおそれ、会津・仙台・庄内とともに四藩の管理とする。四藩の代表による合議で方針を立て、実務は旧奉行所役人と米沢藩士とが担う体制となった。七月二十五日に新政府軍が太夫浜へ上陸して、翌日には沼垂まで進軍、信濃川を挟んだ砲撃戦の後、二十九日早朝

に渡河して町内外で戦闘があり、色部長門を関屋で討ち、新潟町を統治する。同盟軍支配下にあつて新潟町の果たした役割は大きい。第一に新潟が開港場であったことである。新潟は慶応四年三月九日に開港が決まっていた。その日が過ぎて五月十八日に新政府は戦争を理由に新潟開港の延期を外国に申し出る。しかし、外国は戊辰戦争に対して局外中立を表明しており、イギリスを除き、一方の当事者である新政府の申し出を拒否し、新潟は開港したとして自国民に対し新潟への渡航を許可した。同盟軍も開港場新潟を同盟軍が統治し開港していることを外国へ通告している。奥羽越列藩同盟を一体の政府として外国に認識されることは、同盟の正統性にかかわる重要なこととであり、実際に開港場として、有名なスネル兄弟をはじめとする外国人商人が新潟港を訪れている。

第二に開港場であることから外国商人による武器の供給地となつていたこと



色部長門記念碑(新潟市中央区関屋)

4 新潟陥落の意義

つぎに新政府軍にとって新潟を陥落させたこととはどのような意味があつたのか。同盟軍も早くから新政府軍が海路で新潟を攻撃する可能性に気付いていた。海軍を持たなかったため幕府が購入していた甲鉄艦を回漕する計画はあつたが実現していなかった。また船で一度に上陸できる兵士の数が限られることなどから、対応はしていなかった。

新政府軍の太夫浜上陸は、越後戦線への兵員増強、諸藩の蒸気船の投入によって可能になった。この上陸によって新発田藩の帰順が実現し、さらに新発田藩の先導で新潟町を攻略することで、中越地方の同盟軍を挟撃する体制ができた。自国への退路を断たれる同盟軍諸藩に大きな

加茂談判以降、越後の地で戦う会津藩・庄内藩・旧幕府兵を含めた同盟軍の中核は米沢藩である。しかし、同盟軍には拠点となる城もなく、統一的な戦術で戦うことは難しかった。米沢藩は謙信の旧領である越後の治安回復を名目に越後に出兵し、会津藩や旧幕府兵の横暴に苦しむ越後民衆の支持を得た。この戦争に領土的野望があつたともいわれるが、加茂談判で戦略目標となつたのは、河井継之助の叫んだ長岡城奪還であつた。

5 近代新潟の出発点

いづれにしても新政府軍の目標は、公正かどうかは別にして、会津・庄内の討伐と明確である。この討伐を理不尽とする同盟軍は、どこまで勝利すれば会津・庄内藩の謝罪による終結が実現するのか、明確ではない。つまり越後諸藩は、当時私怨とも考えられた新政府軍の会津・庄内討伐と目的のない会津・庄内寛典を求める同盟軍の戦いに巻き込まれたのである。

こうした北越戊辰戦争全体の中で、その地域で戦われた戦闘や人夫・食糧徴発などの事実を捉えるとともに、この後の地域の近代にとって、この戦争がどのような意味を持ったのか検討することが、戊辰戦争一五〇年を記念するということであろう。例えば落城後、峠を越えてやうとのことで逃げていく殿様を見送つた人々は、どう感じたのか。動員されたにせよ新発田藩兵が戦場へ向かうのを阻止した人々は何を思ったのか。新政府軍の下で旧来の村役人たちの排斥運動を進めた人々は、誰に何を期待したのか。二五〇年間続いた、変わることはないと思えた幕藩体制が崩壊する中で、どのような新時代が来ると考えていたのか。そして、その後の近代的な国家、社会秩序、文化のなかで人々はどのように生きていったのか。もう一度北越戊辰戦争を新潟県近代の出発点の一つとして考察する意義がある。

(いとう すけゆき 館長)

特別展

玉と鏡の世界

— 西安・新潟友好交流特別展

小林 隆幸

この秋、みなとびあが、パワースポット。になります！

古代日本人のあこがれの品物であった、本場中国の玉製品と銅鏡、計八〇組がみなとびあへやってきました。玉と鏡とは、どちらも神聖で霊的な力を持つとされる宝器で、装飾品や実用品として使用されるほか、権威の象徴であったり、祭祀に使用されたり、死に際して遺体とともに埋納されたりしました。玉や鏡は、それを持つことで、人智を超えた力が得られると考えられていたのです。そのため玉と鏡には、その時代の権威者や人々の願い、思想が反映されています。

新潟へ届けられ、みなとびあで展示される玉と鏡は、中国西安博物院の所蔵品です。西安博物院とみなとびあは三〇〇七年に友好提携しており、昨年、友好提携一〇周年を迎えました。今回の特別展は展名にもあるように、その友好を背景に開催されるものです。また同展の開催は、新潟が来年一月一日を迎える開港一五〇周年を記念してもいます。西安博物院と協力して実施される同展は、国境を越えた東アジアの文化交流であり、新潟が外国に向けて開かれた年を記念する行事として

てふさわしいと考えます。

西安博物院が所在する西安市は陝西省の省都で、かつて長安と呼ばれた中国を代表する古都です。長安は西方世界へ通じるシルクロードの起点であり、また、古代中国の歴代王朝が都を置いた重要な地でした。

西安を中心とする地には、西周・秦・前漢・隋・唐など中国を代表する大王朝をはじめ、合計一三の王朝が首都を置きました。その期間を通算すると千年に及びます。そのため西安には、歴代王朝の繁栄を物語る遺跡や文化財が数多く残っており、それらは往時の歴史を今に伝えるとともに、優れた文化・観光資源になっています。今回展示する玉と鏡も、西安に残る貴重な文化財の一つです。

玉の場合、日本で一般的なものは身に付ける玉です。歴代天皇の皇位の象徴とされる三種の神器の玉などが想起されます。古墳からも勾玉など権威や富を象徴する玉が出土しています。中国では、さまざまな形や用途の製品が玉石で作られてきました。古くから、きめ細かでなめらかな玉は、徳と美の象徴であり、玉には仁・義・智・勇・潔の五徳があるとされてきました。

玉の場合、日本で一般的なものは身に付ける玉です。歴代天皇の皇位の象徴とされる三種の神器の玉などが想起されます。古墳からも勾玉など権威や富を象徴する玉が出土しています。中国では、さまざまな形や用途の製品が玉石で作られてきました。古くから、きめ細かでなめらかな玉は、徳と美の象徴であり、玉には仁・義・智・勇・潔の五徳があるとされてきました。

た。そして玉を身に付け愛用することで、玉に内蔵された徳のパワーが自分自身に乗り移ると考えられていたようです。

また、玉には遺体を腐らせない力があるとされ、死者とともに埋葬される玉器も数多くありました。遺体の上に置いたり、口にくわえさせたり、目や耳をふさいだり……。今回の展示品の漢代の玉蟬は、死者の口にくわえさせたものです。蟬の脱皮が死者の再生を意味していたようです。

鏡も日本の三種の神器の一つにあり、また古代の鏡は古墳からも出土しています。中国で作られた鏡が古墳から見つかった場合は、かなりの有力者の墓だったと判断されます。鏡を所有していることは、古代の有力者のステータスの一つだったようです。

ものを映し出す鏡には特別な力があるとされ、姿を映して身なりを整える以外に、魔よけや幸福を招くマジカルな道具として神聖視されてきました。そうした鏡に対する期待は、表の鏡面ではなく裏面の紋様や文字に表されています。鏡を所持する効能がそこに秘められているのです。

今回の特別展では、西安に都を置い

た代表的な王朝から、周(戦国)・秦・漢・唐の四つの時代に分け、その王朝・時代に関連する玉と鏡を展示紹介します。それによって、玉と鏡を持つ各時代の人々が、どのような時代を生きたか、どのような思いを玉と鏡に託していたか、それを読み取ってもらうことを狙っています。

本特別展の会期は九月十五日から十月二十八日までです。九月二十四日の中秋の満月には、午後八時まで夜間開館し、月の力を借りながら玉と鏡を鑑賞します。この機会を逃さず、玉と鏡のパワーを感じてみましょう。

(こばやし たかゆき 副館長)



月宮嫦娥鏡(唐) 月の世界が鏡に描かれている



小口鉱区跡に立つセメント像(2018年8月7日 筆者写す)

の勤労奉仕団体です。構成メンバーは総勢47名の画家、彫刻家、漫画家たちで、彼らは全国の炭坑や油田に出向き、現場で士気を高める作品を制作することを任務としました。新潟県には7名の隊員が派遣され、絵画班は戦争画や戦士の肖像画を、彫塑班は西山、東山、それに新津の油田に分かれて「石油戦士」のセメント像制作を急いでいると、当時の新聞が報じています。

このとき制作された3体のうち、西山と東山の像は戦後に修復・移設され、現在は出雲崎町の石油記念公園および長岡市立桂小学校にそれぞれ保存されています。いっぽう新津で制作されたとされる残り1体の所在は長く謎に包まれていましたが、県内外の作家や研究者の調査により、蔓草に覆われた作品が近年確認されたのです。自然に守られてきたからでしょうか、戦中のセメント製にしては存外状態は良好です。

涼しくなった秋、新関駅から彫刻が立つ鉱場跡までゆっくり登り、小口観音堂に立ち寄って駅にもどるまで、1時半の散策コースはいかがでしょうか。

木村 一貫(きむら ひとやす 学芸員)

歴史さんぽ

鉱場跡の戦時彫刻

新潟市秋葉区小口

JR磐越西線の新関駅を出て能代川を渡ると、新津丘陵に向かって伸びる市道大関朝日線の両側に、秋葉区小口地区が広がって見えます。明治22(1889)年まで小口村だったこの地は古くから草水すなわち石油が出ることで知られ、高田藩領だった元文年間(1736-41)にはすでに灯火用の採油が行われていたそうです。本格的な開発が始まったのは明治29(1896)年、油脈があると確信した鷺田種徳が苦勞の末に出油に成功してからです。以後小口は、金津とともに新津油田を代表する鉱区としてその全盛期を支えました。

かつて賑やかだったであろう鉱場跡は、今は杉をはじめとする樹木が生い茂り、静かな林になっています。ただ、作業場だった頃の痕跡は今でも残っています。大関朝日線と新津4-272号線の広い分岐点の道端に、台座に載った一体のセメント製人物像が立っているのです(写真)。戦前は像の周辺に帝事務所や厚生施設があったとき、おそらくここは日々職員が行き交う場所だったのでしょう。

この像は昭和19(1944)年9月、「軍需生産美術推進隊」によって現地で制作されたものです。軍需生産美術推進隊とは、画家の鶴田吾郎(1890-1969)を隊長として同年4月に結成された美術家

おすすめの一冊

みなとまち新潟の社会史

新潟という地名が現れるのは十六世紀の中頃で、現在の中心市街地に新潟町が建設されるのは十七世紀の中頃です。この地が発展してきたのは街全体がみなとまちとして機能するようになり、経済活動を活性化させることが出来たからです。以来、新潟の人々は、港の機能が低下しても港に寄り添い暮らしてきました。本書を読み進めると、みなとまちでありつつけるために、港の改良に尽力し、地の利を生かした交易ルートを確立しようとした新潟の人々の姿が浮かび上がります。

本書は、一般向けであると同時に、新潟市に所在する八校の大学、短期大学の「地域学」のテキストとしても使用できるように企画されました。執筆は大学教員をはじめ、様々な専門分野の研究者が分担し、都市景観や風俗、グローバル化の視点からもみなとまち新潟の来し方を解き明かしています。

開港一五〇年を迎える新潟港と、新潟港に街の命運を委ねてきた新潟の歩みをいまいちど振り返るだけでなく、これからの新潟のまちづくりを考える際に手元に置きたい一冊です。

(監野 かおり 学芸員)



新潟都市圏大学連合(企画) 諫山正、高橋安、平山征夫(監修) 新潟日報事業社 2018年3月

刀剣を愛でる人々

今年の六月三日まで開催した「キラリ★新潟(美)の刀剣」展は幅広い世代から大変多くの方に来館いただき、刀剣の人気を実感しました。常設展示も企画展に合わせた内容にしたいと思いい、川村修就関連資料を展示するケースに修就の鎧などを展示しましたが、候補を探さず中で一つ興味深い資料を見つけました。

「義弘刀写 越後国新潟 検断久兵衛所持」について

その資料は、川村家資料の一つ「義弘刀写 越後国新潟検断久兵衛所持」(写真1)で、新潟町の松浦久兵衛が所持していた刀の押形(拓本)です。松浦は「検断」という、町人の代表として町の運営にあたる町役人を務めていました。「義弘」は南北朝時代の越中の刀工で、江戸時代には大名も義弘の刀を所持しています。義弘作の刀剣は現在国宝や重要文化財に指定されるような名刀も少なくありません。修就は久兵衛に頼んで刀の拓本を採らせてもらったようです。

が禁じられたと考えられていたこともありましたが、近年の研究では、武士は武士以外の身分から刀を取り上げたわけではなく、刀の帯刀を身分の差と関連付けて許可制とし、帯刀できる場面についても厳しく制限するにどういったと考えられています。ただ、刀の所持自体は禁止されませんでした。

江戸時代の越後で刀の扱いが具体的にどのような状況だったのか、残念ながらまだ詳しい研究はありませんが、天領時代の新潟町の制度について書いた古文書には「検断は奉行所からの呼び出しの時と火事の時帯刀御免」とあります(『星霜雜記』)。このことから、天領時代の新潟町では、帯刀できる場面は限られたものの、刀を家の中に保管し、鑑賞すること自体は許されていたと考えられます。そのため、修就も久兵衛が刀を所持していることについて問題にできなかったのでしょうか。

刀を買う、集める

松浦久兵衛の所持していた刀は義弘という著名な刀工の刀でした。残念ながら、関係資料がないので先祖伝来の刀なのか、久兵衛が購入した刀なのかはわかりません。仮に久兵衛が購入したとする場合、武士以外の人々が刀を購入

することは可能だったのででしょうか。

新潟町を離れ、市右衛門新田(秋葉区)の事例になりますが、当地の地主で苗字帯刀御免を得ていた高橋九之助の日記に刀剣の売買の話が出てきます。九之助は書画などを収集しており、新潟町の道具屋をしばしば訪れました。九之助は刀も集めており、嘉永四(一八五二)年八月三日には「山城国信国」「新藤源国義」などを購入しています。

また、年代は不明ですが、九之助が「兼元」や「盛重」の刀を購入している記録があります。「兼元」については、鐔は「早乙女つば」と書かれており、刀身のみならず刀装具についてもこだわっていることがわかります(写真2)。また、盛重の刀については

「地鉄の潤いは応永の頃の作に劣らない、殊に刃文は一際優れている」という鑑定を記した文書が残っています。

こうした資料からは、江戸時代にすでに刀剣を武器として扱うだけでなく、刀工の作風や美しさを愛でる文化があり、しか

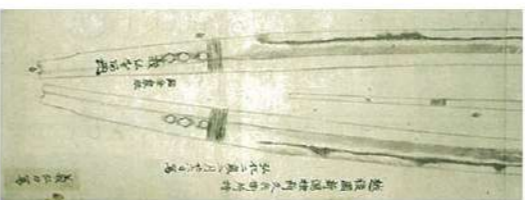


写真1「義弘刀写 越後国新潟検断久兵衛所持」(部分、新潟市歴史博物館所蔵「川村家文書」)

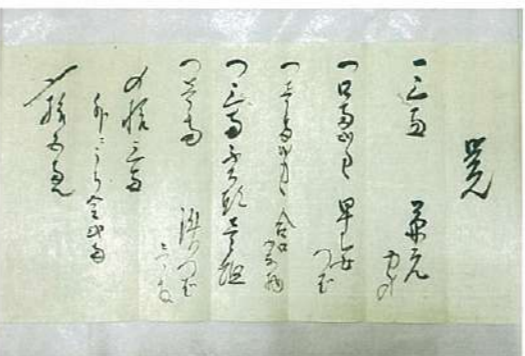


写真2「兼元」(新潟市歴史博物館所蔵「高橋九之助家文書」)

田嶋 悠佑

もそれを武士以外も享受していたことがわかります。先に紹介した新潟町の松浦久兵衛も、もしかすると「義弘」という刀工に注目して刀を手に入れたのかもしれない。そこには、現代につながる刀剣鑑賞文化の一端をみることもできます。

(たじま ゆうすけ 学芸員)

註
 (1) 藤本久志「刀狩り」岩波書店、二〇〇五年
 (2) 伊東祐之「史料紹介 高橋九之助と書画」豪農の書画受容の一例として(新潟市歴史博物館「新潟・文人去来」二〇〇六年)
 (3) 当館図録「近世黎明—堀直寄と新潟」で目録五番「越前住兼直」を「堀直政所用の刀と伝えられ」としましたが、「堀氏が越前在任時に有していたものの、誰の所用かはわからない」と訂正し、おわび申し上げます。

館長日記

新潟市歴史博物館 館長 伊東祐之

高雄のフォーラム

八月四・五日、台湾の高雄市立歴史博物館が主催した「一九二〇世紀アジア港湾都市の興起」というフォーラムに行ってきました。この会は高雄市の近代港湾の建設開始、港湾駅開業、都市計画開始から一〇〇年を記念して開催されました。台湾と日本の発表者二六人、司会コメントーターなどを含めると四五人が次々に登壇する非常に大きな会でした。発表者のうち六人が日本人で、その一人が私でした。

高雄市は、一〇〇周年を契機に広大な築港埋立地「哈瑪星」(「浜線・港湾鉄道に由来)地区で、歴史的建造物の復元事業など、市街地再開発を行う「興濱」プロジェクトを進めています。この会の主旨説明をした博物館副館長王御風氏が強調したのは「プロジェクトはハード面だけでなくソフト面も不可欠であり、この一〇〇年を研究して、地域の歴史について地域の人々が共有できる歴史物語を持つ必要がある」ということでした。

台湾は、現住民族や清朝時代



フォーラムの様子

に渡来した漢人、日本統治時代に渡来した日本人や中国人、そして戦後に中国本土から来た人々が、軋轢を繰り返しながら暮らしてきました。それぞれの歴史認識にも大きな違いがあるようです。王副館長の発言は、それを踏まえていたように思えました。高雄に暮らす者として共有できる歴史認識を持ち、台湾・高雄の将来を考えたという思いです。

背景は異なりますが、当館がめざしていることも同じです。私たちは、地域に残るモノに歴史的価値を見出して地域の文化財とし、その過程を通じて地域の歴史を掘り起こし、発信します。そして、地域のみならず、それらをもとに歴史物語を紡ぎ、地域の魅力を共有し、まちづくりを活かしてほしいのです。当館の役割を再確認できた有意義なフォーラムでした。

収蔵資料紹介

懸硯

写真は、今年度新たに寄贈された資料で、懸硯とよばれる筆筒です。筆筒の一種で、江戸時代から近代にかけて、廻船などの和船の船乗りが使った道具です。懸硯は多くの場合、一般の船乗りではなく船頭の持ち物で、金庫のように大事なものをに入れて使いました。船往來手形などの廻船の航行や積み荷に関わる重要書類、現金等を入れておき、水難事故に備えて浸水から重要書類を守るため、大変堅牢な造りになっています。

この懸硯の底面には墨書があり、向かって正面に「天保七年」「佐州小木湊屋利八郎」、向かって左側面に「越後早川」「本間太左衛門」と書かれています。引出にも「本間太左衛門主」と書かれています。これらの墨書から、現佐渡市の小木地区で造られたものと思われる。小木は船筆筒の代表的な産地で、幕末期には豪華な船筆筒を産したことで知られています。

船筆筒に造詣の深い小泉和子氏によれば、船筆筒には実用的なもの、独特の装飾様式をもつ豪華な造りものがあり、後者は十九世紀後半から急増し、明治二十年代ごろまでが最盛期であるといえます。こうした豪華な船筆筒が生まれた背景として、船頭の収入の多さとともに、商談の場での看

板として機能したと推測しています(小泉和子「筆筒」より)。

懸硯の扉の金具は、開口部を下に向けて浸水させない重りの機能も持ちます。この懸硯を見ると、施錠や重りという機能以上に装飾が目を引きまします。船筆筒という入物は、中の書類を水や盗難から守る実用的な機能のほかに、装飾品としての多面的な役割を果たしているといえます。今年度十一月から開幕するむかしのくらし展「いれもの」では、日常生活の中で使われてきたこうした入物が持つ役割を、様々な角度から紹介する予定です。

(森 行人 学芸員)

